

2020年12月20日 久宝教会 クリスマス（降誕日）礼拝

メッセージ「カナリアたちのクリスマス」

牛田匡牧師

聖書 ルカによる福音書 2章1-20節

「炭鉱のカナリア」という言葉があります。昔、石炭を採るために炭鉱を掘り進む際に、炭鉱夫たちは人間よりも有毒ガスに敏感なカナリアを連れて行き、カナリアが鳴かなくなったり、その様子がおかしくなったりすると、急いで避難したと言われていています。危険が身近に迫っていることを知らせる信号が、カナリアだったということです。

今、私たちが生活しているこの社会は、とても大きくなり、便利になりました。「お金」を媒介して、お互いの名前も顔も知らなくても、お店では必要な物を買うことが出来ます。また誰が運転しているかを知らなくても、電車やバスを利用することも出来ます。それこそ、このインターネットや電気などについても、誰がどのように維持管理しているかを知らなくても、便利に利用することが出来ています。この社会がどのように出来ていて、どのように動いているのか、を全て理解することは、恐らく誰にも出来ないのではないのでしょうか。しかし、そんなにも巨大になった社会が、もし舵取りを間違えていたら、どうなるのでしょうか。その巨大な船は、どこかに座礁するか、冰山にぶつかってしまうかもしれません。そうならないように、社会に警鐘を鳴らすのが、本来のジャーナリズムの使命であり、また様々な芸術の役割でもあります。そして身に迫る危険に対して、いち早く反応するカナリアたちは、いつの時代でも、その社会の中で片隅に追いやられている小さくされている人たちでした。船が進路を間違える時、社会が誤った方向に進んでいる時、その歪^{ひず}みは、まず社会の中で小さくされている人たちの上に重くのしかかります。そのカナリアたちの悲鳴、社会に対する警報を聞き逃さないことが重要です。しかし今は、むしろその声を無視したり、見殺しにしたりして、それこそ始めからいなかったことにしておこう、としてはいないのでしょうか。

社会の歪^{ひず}みの中で、権力によって抑圧され、本来の力を奪われていた人々、カナリアたち……。今から約2000年前にパレスチナの地で起こったクリス

マスの出来事は、そんなカナリアたちの中で起こった出来事でした。当時の社会では、王族や貴族などのごく一部の特権階級の人々を除いては、人口の大多数は貧しい生活をしていました。人々は生産物の7割8割を税として取り立てられていたようで、生活が出来なくなって借金をし、その借金を返すために土地も財産も失ったという人々も多くいました。権力者からいじめられている人は、自分よりもさらに弱い人をいじめます。自分の農地を持たない小作農、出稼ぎの日雇い労働者たちは、当時の社会の中でも、底辺に追いやられていました。そして今回の聖書のお話に出て来たヨセフもマリアも、羊飼達もまた、そのように当時の社会の中で底辺に追いやられていた人たちでした。

イエス様の誕生場面が描かれている『ルカによる福音書』2章は、冒頭から「その頃、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令ちよくれいが出た。これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録であった」とあり、いかにも歴史的な実話であるかのように書かれていますが、実際にはどれも年代が噛み合っていません。ですが、大切なことは「歴史学的に間違っている」ということよりも、イエス様の生き様、言葉とふるまいに接した人々が、その死と復活を経験した後に、イエス様のことを語り伝える物語として、「たしかあの頃、住民登録があった」というように、自分たちの歴史の中に確かに起こった出来事として記憶しようとした、ということが、大切なのではないかと思います。

またガリラヤ地方にあるナザレから、ユダヤ地方にあるベツレヘムまで、100キロ以上もある道のりを出産間際になっていた身重のマリアと一緒に、住民登録のために夫婦二人で歩いて行ったというのも、現実的ではありません。「住民登録」は居住地であるナザレでするはずですし、家父長制社会ですから、ヨセフ一人が出向いて申告すれば事足りたはずで、これも「救い主はダビデの子孫から出る」「救い主はベツレヘムから出る」という人々の言い伝えがあったためだと考えられています。しかし、そのような中でも、ヨセフとマリアには、そこが彼らの親類縁者のいる故郷の町であったとされているにも拘らず、そこでは泊まる場所、居場所が与えられなかったということが記されています。そのためにマリアは、飼葉桶の置かれ

ている家畜小屋で、孤独と不安の中、初めての出産に臨んだということが分かります。

続いて登場するのは羊飼いです。彼らは緑の草原でのどかに過ごしていたわけではありません。草も水も乏しい、石と岩だらけの荒れ野で、わずかな草と水を求めて、羊たちを連れて歩き回り、野獣や盗賊たちから羊を守るために夜通し番をしていました。命懸けの危険な仕事です。また律法に定められている安息日を守ることが出来ない仕事でもありますので、宗教的にも穢れている、罪人の仕事と見なされていました。もちろん、羊は主人の財産であり、自分たちは雇われの身でした。

「神様からも、人々からも見放されている」と考えられ、また自分たちでもそう思い込んでいた、そんな羊飼いたちの所に、救い主誕生の知らせが、天使によって最初に告げられました。そして「いと高き所には栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ」という天使たちの合唱が聞こえたとあります。もちろん、福音書をまとめたルカが、その場にいたわけではありませぬので、何人の天使たちが歌っていたのか、またその姿がどのような形だったのかは分かりませぬ。しかし、差別と抑圧に満ちていた、決して「平和」とは言えないこの世界に、救い主がお生まれになった。だから今こそ「天の神様には栄光がありますように。この地上には平和がありますように」という羊飼いたちの素直な思いが、伝えられ、記憶され、書き記されたのかもしれない。そして、羊飼いたちはマリアとヨセフ、飼葉桶に寝ている乳飲み子を探し当て、喜びにあふれて再び荒れ野へと戻って行きました。このように最初のクリスマス、神の子イエス・キリストの誕生は、日の当たらない社会の片隅で、抑圧され差別されていた人たち、社会の犠牲とされていたカナリアたちの間に起こった出来事でした。

私たちが、誰かの誕生日をお祝いするのは、その人を大切に思っているということの表現です。「生まれて来てくれてありがとう」「あなたと出会えて嬉しい」ということ表現です。では、イエス様のお誕生をお祝いするこのクリスマスを、私たちはどのように過ごすのでしょうか。クリスマスにお生まれになったイエス様は、誰とどのように生きられたのでしょうか。そのイエス様が何故、私たちにとって大切なのでしょうか。そのことを改

めて考え直したいと思います。

今年は、コロナ禍の中で初めて迎えるクリスマスです。例年であれば、クリスマス礼拝には少しでも大勢の人が集まってほしい、みんなで楽しく賑やかに^{にぎ}お祝いしたいと思って来ました。ですが、今年はこんなにも寂しいクリスマス礼拝になりました。ウイルスの感染を防ぐために、人が集まるといけない、人と人との接触を極力減らさないといけない。これまで教会が大切にしていた「人と人とのつながり」「一緒にいること」を、正面から否定されるような事態になっています。きっと世界中の教会が悩んでいることでしょう。ですが、思い返してみると、「どうぞ来てください。クリスマスをご一緒にお祝いしましょう」と言って来た私たちが、見落としてきた人たちが沢山いらしたのではないのでしょうか。教会に「来たくても来られない人たち」もいらしたでしょうし、また「来たいとも思わない人たち」もいらしたかもしれません。

このコロナ禍の中、多くの企業ではリストラが行われています。仕事を失い、住む所も居場所も失ったという人も少なくありません。また自死する人も毎月統計が出される度に増え続けています。特に女性が増えているとのことですが、そこには経済的な事情だけではなく、人間関係も含めて様々な要因があるのでしょうか。もう既にカナリアたちは悲鳴を上げています。次々と倒れて行っています。その悲鳴に気付き、低みに立って見直す時がもう来ています。

カナリアたちのクリスマス……。そのことを思い、コロナ禍の現状を見ると、とても「クリスマスおめでとう」とは言えないような気がします。

「おめでとう」と言えなければ、言わなくてもいい。言いたくなければ、言わなくてもいい。でも、確かなことは、そんな人たちのために、そんな人たちの間に、イエス様はお生まれになったということです。そのことを確かめるために、私たちも羊飼いたちのようにベツレヘムの家畜小屋へ行きましょう。今しんどい思いをされている人、カナリアの隣に寄り添わせて頂く時、私たちはそこに、飼い葉桶に眠る乳飲み子を見つけるのだと思います。「地上に平和がありますように」、そのために私たちは今日もこれからも、神様によって導かれていきます。